View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

芸術観光学の理論と実践 8 変容する海外詠 ： 梶山千鶴子における「社会性俳句」の問題

著者	平居 謙
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	16
ページ	80-88
発行年	2016-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001326/

芸術観光学の理論と実践⑧

変容する海外詠

― 梶山千鶴子における「社会性俳句」の問題 ―

平居　　謙

要　旨

梶山千鶴子第１句集『國境』には、①「明るい俳句」②「社会性俳句」③「伝統的俳句」という３つタイプの俳句が収められている。彼女の「社会性俳句」は海外詠に多く現れるが、それに留まらず、国内詠にもその傾向を波及させ、単なる身辺題材の俳句にはない力強さを句集内に導入することに成功している。これらは俳句上の師である多田裕計に由来する初期梶山俳句の重要な要素である。しかし、第二句集以降、海外詠中の「社会性俳句」は徐々に淡いものと変わってゆく。同時に国内詠においても「社会性俳句」の割合は縮小されてゆく。本稿では、師・多田裕計の俳句観を参照しながら第１句集『國境』の特徴を分析する。さらに海外詠の変容を句集『濤の花』『鬼は外』について考察する。

はじめに

本誌前号において、筆者は梶山千鶴子第１句集『國境』における海外詠を分析・考察した。そこでは国内詠ではなし得ぬ明るく開放的な表現を可能にしていることについて確認した。また、それだけでなく現地にゆかねば実感し得ないその場所を巡る「傷」に関する句も多くなされていることを知った。そしてそれらが織り成す世界が『國境』の価値であると断じた。

当該論考では論じきることができていなかった海外詠のその後の展開について本稿では考える。

１　梶山千鶴子『國境』の３要素

梶山千鶴子は、師自身の作句における理想を託されるかのような形の「賛」を引っ提げて句壇に登場することになる[1)]が、その第１句集『國境』[2)]は、年代順に分けられた７つの部から成り立っている。「遅ざくら」（1965 年）「鶴一羽」（66 年）「ザボン売り」（67 年）「メヒコの国」（68 年）「北の馬」（69 年）「鮭切身」（70 年）「出雲の雪」（71 年）である。最初の「遅ざくら」部冒頭には、次の３句が並んでいる。

①街騒やガラスのごとく木の芽立つ　　②メーデーの旗先に触れ葉の揺るる
③遅ざくら青き澱みを櫓音ゆく

これは『國境』に収められている俳句の３タイプを典型的に現すものであるといえる。すなわち、
①斬新な表現と躍動感覚を旨とし主に明るい旋律を志向するタイプ（本稿では「明るい俳句」と略称）
②「社会性俳句」に属する風刺や思想上の主張を内包しているタイプ（「社会性俳句」と略称）
③重厚・濃厚を旨とし、静かで陰影を志向する傾向が強い伝統タイプ（「伝統的俳句」と略称）
の３つである。最初の「街騒や」の句は、それまでの伝統俳句の中には稀な都会的感覚や凛とした方向性が際立っているもので、騒がしい街とその中に萌え初める木の芽という対比は極めて現代的であ

る。加えて「ガラスのごとく」という比喩が煌びやかな特徴となっている。多田裕計の弟子の第1句集の最初におかれてしかるべきものである[3)]。次の「メーデーの旗先」の句は、「メーデー」という思想性の強い言葉を核として、それに作者の新鮮な感覚が絡みつくようにして成されたものである。俳句上の師である多田裕計に「地階の百合ゆれて近づくメーデー歌」という句があるが、多田の句は、清純な心の象徴である「百合」が「地下」すなわち心内で揺れ、その揺れの原因を社会のうねりのようなメーデーの歌であるとする句である。あくまで、地下であり心内の風景であり、社会参加はあくまで「来るべき予感」のような形で語られている。それに対して、梶山の句「メーデーの旗先に触れ葉の揺るる」では、地上でメーデーの振られた旗を見て、その先が葉に触れてそれが揺れている「現実」の風景を捉えたものであると言える

3句目の「遅ざくら」は桜色と川の深い青との対比という多田裕計の弟子らしいあるいは梶山千鶴子らしい新鮮な表現を用いながらも、極めて伝統的な日本の美を志向したものである。

梶山の師である多田裕計は『草萌えにシヨパンの雨滴打ち来たる』[4)]の終盤に収められた「河に生きる」というエッセイ中で、中国の河と比較して日本の河の風情について次のように述べている。

> そこへゆくと、流石に日本の河はいかにも小さく、そしてこじんまりと清潔な感じであって、きれいな松山の会田に、石砂の河原をもって、さらさらと流れる青い河とか、桜の花の吹き込む碧潭とかは、まさにわが日本の独壇場であり、そこにはそこで云うに云われぬ風情も詩趣もあるわけである。隅田川の花吹雪とか、淀川の満月とか、長良川の鵜飼のかがり火とか宇治川の蛍狩りとか、嵐山の紅葉とかーああ、日本は美しき国なる哉。一日一望、凡てこれ詩ならざるはなしの生活である。

「青い河」「桜の花の吹き込む碧潭」など、あたかも梶山「遅ざくら」の句を髣髴させるかのような世界を評して「わが日本の独壇場」「日本は美しき国」と多田裕計は感慨を語る。また、同エッセイを彼は「河はまことに人生の象徴である。また歴史の象徴である。それにまして生活詩をつらぬく哲学であり音楽である。」と締め括っている。梶山が直接このエッセイを意識したかどうかは現在のところ確認できない。しかし、多田裕計の上記のような世界観が句評を通して沁みこんでゆき、吟行を通じて実践化されていったと考えることは難しいことではない。

「社会性俳句」に関しては次項第2節で集中的に考察することとして、以下に「明るい俳句」と「伝統的俳句」をそれぞれ5句ずつ挙げる。まず、「明るい俳句」について検討を加える。

潮碧し乳房めきてマンゴ熟れ　　愛に似し寂しきヨット沖へ去る
能登愛し夏蝶うつすコンパクト　　春惜しむ魚夫や波止場の白ペンキ
月光の水晶砕き川神輿

最初の「潮碧し」の句は、上五の「碧い」という語が新鮮であり、畳み掛けるようになされる中七で「乳房めきて」という大胆な比喩が生き生きとしている。そして下五「マンゴ熟れ」で鮮やかな黄色が「碧」の上に重ねられてゆく。次句「愛に似し」は寂しい句であるが、静けさで船着場から沖へとさってゆくヨットの姿に、愛の別れを直感的に重ね合わせた句でこれも表現の冴えを感じさせる。3番目の「能登愛し」の句は「夏蝶」を直接に見るのではなく「コンパクト」に映ったそれを見るとする点に凝らされた工夫を感じる句である。4番目「春惜しむ」の句は「魚夫」「波止場」という繋がりの強すぎる2つの語の間に、「白ペンキ」のイメージが入り込んで適度な距離感を保つ均衡の妙が命である。最後の「月光の」の一句は、「月光の水晶砕き」と繋がっていったのち、「神輿」という

言葉によってこの鋭い感覚が拡散することなく一点に集中してゆくのである。次に「伝統的俳句」を見る。

星かわく闇の深さにピラミッド　　小舟すぎし波紋へ雁の影落ちる
げんげ田の曇りて馬の匂ひする　　綿虫の青くなるまで地の冷ゆる
亀ねむる間も大銀杏芽吹きをり

1句目「星かわく」には「ピラミッド」が登場する。一見異国情緒に満ちた印象を受けるが、「闇の深さ」を志向するこの句の底には、陰影を重んじる日本的な抒情と通底するものが存在している。2句目「小舟すぎし」の句は、「小舟」や「雁の影」という言葉通り、実態が何も姿を現さない。影だけで語りつくすという手法自体、極めて高度なものである。3句目「げんげ田の曇りて馬の匂ひする」からは、懐かしい日本の風景がストレートに浮き上がってくる。4句目の「綿虫の」は、綿虫が空の青にそまってゆく間に「地の冷ゆる」という負への方向性が、この句の雰囲気を形作っている。第5句「亀ねむる」の句も、「芽吹く」の語彙の新鮮なイメージは強いが、それ以上に冒頭の「亀ねむる」という表現が落ちついた句の方向性を支配している。

上記のごとき、さまざまな方向性の融合体として梶山千鶴子第1句集『國境』は存在している。

2　『國境』における海外詠と社会性俳句

さて、梶山句集『國境』は、題材的には戦後俳句史上初めてとも言える分量の海外詠を有する句集であり、筆者は「梶山千鶴子『國境』」[5)]では、海外詠と国内詠という、句が作られる「場」の違いに注目して論じた。

その「場」に、前節で見た「内容面における3分類」を当てはめると以下のようになる。例えば、韓国に旅行に行った際に作られた、句集名とも強く関わる「鶴一羽あゆみ國境の雪散らす」は、題材的には海外詠に属し、内容面では「社会性俳句」に分類される。日本の中では実感できない「国境線」の問題に直面する時に句の核となる思想が現れたものであろう。国境線を人は越えることができないが、鶴ならばひと飛びである。雪を散して舞う一羽の鶴に、同一民族が分断されて住まう苦しみとそこからの脱却の祈りを込めた秀逸の一句である[6)]。

『國境』における海外詠には「社会性俳句」が鋭い形で数多く現われているのだが、同時に海外詠以外の作、すなわち国内において作られた句にも「社会性俳句」と認めることのできるものが多く存在する。俳句においては社会性を有しているか否かが問題ではなく、社会性を如何に高次に表現し得ているかが問われる。従って、社会的な用語（例えば下記の句群で言えば「改選期」や「家庭裁判所」などの用語）あるいは「働く者ら」という労働者への目線だけを確認しても芸術としての評価に繋がるわけではない。しかしここでは彼女の社会性への志向をみることが目的であるため、若干の註釈が必要なものを除いては、それぞれの句における社会性のある用語に傍線を引いて示すに留めた。

菜殻火の焔先が割れて改選期　　雪速し働く者ら肩まげて
戦後の鳩啼いて禁裡の曼数沙華　　一滴よりはじまる梅雨の改選期
椎の花匂ふや家庭裁判所　　松林夏日に透けて流人墓
湾の向ふの少年院も五月雨るる　　帆立貝われに国引く力欲し

3句目の「戦後の鳩」はいわゆる赤線地帯を指す。5句目は「椎の花匂ふ」は男性の精液に近い匂い

を春放つ椎の花と「家庭裁判所」（で扱われる男女間の係争）とを連想で繋いだ大胆な表現である。6・7句目の「流人墓」「少年院」はいずれも社会の日陰に当たる存在で、そこに目を敢えて向けるとき、新たな問題意識が生まれてくることは、俳句に限らず文学一般の常套的手法のひとつである。

3　特に「女性の立場」という問題について

これらの中で、芸術的評価という観点から最も注目に値するのは最後の「帆立貝われに国引く力欲し」である。俳句は生活詩の要素が強く、身辺に題材を取ることが多いためか、往々にして発想のスケールが小さくなることがある。しかしこの句では、個人の問題を遥かに超えて、国自体を引っ張ろうとする若い気迫に満ち溢れている。帆を大きく広げ、自分を信じて進もうという気概が感じられる。その感覚が空回りすることなく伝わるのは、ほどよいユーモアが含まれているからである。帆立貝[7]は古くには殻を広げ帆船のように帆を張り海面上を走行して移動すると考えられていたためその名が付けられたという。この句には、その名の由来をも思わせる少々夢見がちな、神話的な響きさえ読み込むことができる。

ここで梶山の「社会性俳句」に関して、「女性の視点」を強く感じさせるものが散見することを指摘しておきたい。上の「帆立貝」の句にしても「われ」が女性である梶山に最終的には収斂することを思えば、この時代においてすでにフェミニズム的発想の萌芽を認めることが可能である。以下に「女」に関する句を幾つか拾った。

女滝とてその律動の乱れざる　　山独活摘む女人高野の鐘をきき
くずれ落つ牡丹をんなの嘆きとも　　蕗刈るや女人高野の塔見えて
今年竹女人高野にひとり来て

1句目「女滝とて」の句に関して、滝に往々として男滝・女滝という名が冠せられているが、ここで梶山が見るのは女滝の「律動」である。また、3句目「くずれ落つ」の句では、「女の嘆き」の一言の中に、女性が置かれる社会的立場そのものへのアンチテーゼが内包されている。2句目と4句目には「女人高野」の語が共通して現れている。女人高野とは、高野山のうち1872年から女人禁制を解いた寺院の総称で、女性はこれらにのみ参拝することが許されていた。

もちろん「女」「女人」という言葉が現れるからと言って、該当句が社会性を有していると考えることは浅見に過ぎない。例えば梶山が、女性の声の喧しきことを単純に笑って詠みこんだと思われる「声が先きに降りてきて花の女坂」のような句には、取り立てて社会性を指摘する必要もないだろう。しかし、上記の一群の「女句」は、「声が先きに」の句と比較[8]する時に、女性の生き方への問いかけの真摯さの度合いの違いは強く理解される。

なお「山独活摘む」の句に関して『梶山千鶴子　自解150句選』（2002年　北溟社刊）の中で、梶山は次のように述べている。

> 多田裕計先生は、大和を愛された。私は先生のうしろから3尺は下がらなかったがよくお供をした。中でも室生寺がお好きだった。（12頁）

ここで梶山が「3尺下がらなかった」と書く時「3歩下がって師の影踏まず」を踏まえていることは明らかである。つまり、三尺下がらなかったのは「師に対して」ということになる。しかし、「女人高野」という言葉が出てくる句に関してこのように述べるということには、ある一定の意味が現れる。つまり単に「師に対して」のみならず「男性である師に対して」というニュアンスが付け加わるのだ。

しかし（この句に限らず）そのような解釈が可能性として開かれているという段階にあるため、その主張[9]はそれほど強いものではない。

4　海外詠の変容 ―『濤の花』『鬼は外』

さてここまで見てきたように梶山千鶴子の第１句集『國境』は、３つの傾向が融合する形で成り立っていた。そしてその中の「社会性俳句」は、海外詠にも国内詠にもともに色濃く現れていた。ところが、第２句集『濤の花』以降梶山の海外詠に大きな変化が現れてくる。『國境』の後海外詠が現れるのは第２句集『濤の花』と第４句集『鬼は外』に限られているので、より厳密には「その２冊の句集においては、海外詠が大きく変化する」と言うべきだろう。まず第２句集『濤の花』の海外詠を以下に見る。

縞馬の派手な貌みてアロハ買ふ　　大虹やハワイの空が真二つ
モスクワのメトロはたのし秋の蝶　　卓上に琥珀夜長の灯にありぬ
星冷えてガラスにひびくバラライカ　　マロニエの落葉の下の地のぬくみ
ルーブルの黄金（きん）の扉を打つ木の実　　枯葉坂一かたまりの似顔絵師
椰子の間にヨット全身夕焼ける　　椰子の高さの下の土着民
三毛作島の太陽大渡り　　塩田の四隅に寂し真夏の日
負け鶏のなほ太陽に羽ばたきぬ　　白鳥の漂ふを見て旅軽し
氷壁やこころ溶け入る隙もなし　　モンブラン翳りて春の卵売り
真夜中の雪流しつつセーヌ川　　牡丹雪オペラ座をいま出し肩に

最初の「縞馬の」「大虹や」には「ハワイ２句」と前書きがある。前者の「派手な貌」「アロハ」という語あるいは後者の「大虹」「空が真二つ」と言う表現から、ハワイの抜けるような空を心から満喫する梶山の感動が伝わってくるようである。続く「モスクワの」「卓上に」「星冷えて」には「モスクワ３句」の前書きがある。灼熱のハワイから一転、底冷えるモスクワの夜と趣は変わるが、「夜長の灯」をに心惹かれバラライカの音色に聞き入る様子がありありと浮かぶ。また最初の「モスクワの」には「メトロはたのし」というストレートな表現さえ現れている。「パリ３句」の前書きを持つ「マロニエの」「ルーブルの」「枯葉坂」の句にも「黄金の扉を打つ木の実」という表現から、パリを歩くときめきを抑え切れない梶山の心象が明るく写し出されている。感じ方によっては哀愁の風景とも認識しえる「落葉」という題材さえその下に「地のぬくみ」を描くほどに海外旅行の体験は作者の心を暖めているのである。「マニラ５句」と記された「椰子の間に」から「負け鶏の」にも同様のことが言える。「椰子の間にヨット」が見えて、それを見ている作者自身も真っ黒に日焼けしてゆく。「太陽大渡り」の語にも、焼けるように熱い中、灼熱そのものを楽しむ作者を感じることができる。「白鳥の」から「牡丹雪」の句までは「スイス、パリ　５句」の前書きで括られた作品である。「白鳥の」の句の結句「旅軽し」は文字通り作者の心の軽快さが一言で現されているし、「真夜中の」の句では、早朝のセーヌ川の清清しい氷解けの流れを眼前に見る思いがする。「牡丹雪」の句は、読みようによってはオペラ座を擬人化しているようにも読めるユーモアが目を惹く作品である。

次に第４句集『鬼は外』であるが、ここに納められている最初の「蟬はげしければ」から「西瓜売り」までには「中国吟遊　９句」の前書きがあり、「ローマ」「スイス」と記された句もそれぞ１句ずつ収められている。

蟬はげしければ故宮の壁赤し　　耳の露はねて輓馬の朝早き

歩哨の前隠元豆をぶらさげて　　楊貴妃も遊びし池の水馬
粥を煮る明易の火の美しく　　炎昼の鶏は羽搏きつつ売られ
暮れつつも水の蘇州の早桃売り　　糸瓜咲き水をへだてて寒山寺
西瓜売り西瓜の山に隠れけり　　片陰もなくてローマの休日よ
ゴンドラの影に濡れゐる登山靴

「中国吟遊　9句」中の最初の句「蟬はげしければ」は、「蟬の激しく鳴く声」と「故宮の赤い壁」のイメージを「強烈さ」を蝶番として結び合わせている。「耳の露はねて」の句は「輓馬」を前にしての、非常に細部に渡る観察が句の生命を引き出す。「楊貴妃も」の句では、中国の悠久の歴史と眼前の光景を繋ごうとするファンタスティックな連想を示す。「粥を煮る」の句は、粥を煮る火という小さなものに目を向けその美しさを評価するというという認識の厳しさを伝えてくる。「暮れつつも」は、夕闇が迫る中で美しく映る水の都蘇州の風物詩を幻想的に描き出す。「糸瓜咲き」は眼前の糸瓜の花の可憐さと、寒山寺の壮麗な姿を、「水」を間に挟んで対比させる。「西瓜の山」の句はユーモアの中に、中国の雑踏の様子をよく現すものとなっている。

中国に関するもの以外では「ローマ」と「スイス」の句がある。ローマで書かれたものは「片陰もなくて」の句で、この初句とおり、一片の雲もない晴れ渡った空のような「ローマの休日」の気分が上手く詠まれている。スイスの句は、なにやら思わせぶりな感じがするが、これについては直ぐ後に述べる。

ここまで第2句集『濤の花』と第4句集『鬼は外』に現れる海外詠を見てきたが、一瞥して分かるとおり、明るく健康的で、海外の地に降り立った喜びと興奮とを素朴に伝える傾向の句が大半である。

第1句集『國境』中の海外詠の中の半分近くもまた、明るく健康的なものであった。例えば梶山は自註『梶山千鶴子　自解150句選』（2002年　北溟社刊）8頁で、「片翼の翳りサイパン大西日」を巡る「胸の張り裂けるような」感覚を述べたあと、「悲しい思いばかりでなく、歳月は人の心を労うことを忘れない。景はいつの間にか本来の島に戻りつつあった。」とも語っている。海外の地は梶山にとって社会性俳句の題材であると同時に、大きな感動を催させる複合的な場所であったわけである。そこには梶山俳句の特徴の一つである煌びやかな「明るい俳句」の手法が存分に生かされていた。以後の句集では、海外詠においては、その傾向に集中していったということになる。

5　希薄化する社会意識

前節4では、第2句集『濤の花』と第4句集『鬼は外』においては、海外詠が大きく「明るい俳句」へと傾斜した状況について確認した。第1句集『國境』においても約半数は、海外の地を訪れた喜びや感動を基盤にしたものであったわけだがその割合がさらに増加したのである。一方で、『國境』では「梶山俳句」のもう一つの特徴である「社会性俳句」が、海外旅行に触発される形で大量になされたのもまた事実であって、それに比するとその後のものは質・量ともに希薄な印象[10]を否むことができない。以下に今一度海外詠における「社会性俳句」引用し、分析する。

椰子の高さの下の土着民　　塩田の四隅に寂し真夏の日
負け鶏のなほ太陽に羽ばたきぬ　　氷壁やこころ溶け入る隙もなし
モンブラン翳りて春の卵売り　　歩哨の前隠元豆をぶらさげて
炎昼の鶏は羽搏きつつ売られ　　ゴンドラの影に濡れゐる登山靴

第2句集『濤の花』「マニラ5句」の中の「椰子の高さ」、「塩田の四隅」、「負け鶏の」「スイス、パ

リ　5句」「氷壁や」「モンブラン」の句、第4句集『鬼は外』「中国吟遊　9句」中の「歩哨の前」の句「炎昼の鶏は」の句、「スイス」の「ゴンドラの影」の句には、社会性が感じられるが、それほど明確に主張されているわけではない。マニラにおいては第2次世界大戦中、日米両軍により激しい市街戦[11]が行われたが、上記マニラの句がそのような歴史を踏まえて読んでさえ、それほど強い感慨を受けるものではない。むしろ「椰子の高さ」という表記によってもたらされる空の青さとその下にいる「土着民」との対比の面白さ、南国の抜けるような空のイメージが印象付けられる句である。また「塩田の四隅」「負け鶏の」の両句は物寂しい作品であるが、個人的な感情に留まる可能性の方が強い。「氷壁や」「モンブラン」の句は、『自註現代俳句シリーズ七期7　梶山千鶴子集』[12]にそれぞれ「スイス。氷壁に威圧感を」「フランスのシャモニー。卵を籠に入れて売り歩いているのは少女」という註書きがある。しかし、「モンブランの翳り」と「春の」卵売りのイメージが並立することで句全体の方向性が定まっていない。これは中国における「歩哨の前」の句[13]にも全く同様のことが指摘しえる。「歩哨」という厳格なイメージと「隠元豆をぶらさげて」という少し脱力した印象とが共存しているがゆえに、そこに主題の明確さが欠落している。「炎昼の鶏」はマニラの闘鶏の句に通じる個人的感傷の範囲に属するものであり、「ゴンドラの影に濡れゐる登山靴」も「濡れる登山靴」に何を読み取るか、鑑賞者に委ねられる部分が極めて大きいものであるといえる。[14]

このように第2句集『濤の花』と第4句集『鬼は外』に現れる海外詠は、第1句集『國境』と比較して総じて社会性が希薄になってゆく。

おわりに

本稿では梶山千鶴子の俳句、特に「海外詠」における社会性の変容について見た。「社会性」は現代の俳句に必要であるという考え方がある一方で、俳句においては「社会性」を有することが至上命令ではなく、句の面白さ・美的水準を上げることが最重要であるという考えもある。筆者においては後者を間違いなく支持するわけであり、執筆しながらそれを強く意識せざるを得なかった。

梶山の師である多田裕計は、当初社会性俳句を非常に重視するが後にこの方向を脱却する。梶山自身も師の姿を追うような形をとりながら同じルートを辿る。本稿ではその後の梶山が深く入り込んでいった境域にまで言及する余地がなかったが、これは項を改めて考察することとしたい。

補註

1) きりん153号「梶山千鶴子論　2　師としての多田裕計」参照

2) 1972年　れもん社刊

3) 前掲きりん153号「梶山千鶴子論　2　師としての多田裕計」参照

4) 1957年　近藤書店刊

5) 本年報前号参照

6) この句は二つの梶山自身による解説書である『自註現代俳句シリーズ七期7　梶山千鶴子集』（1992年　俳人協会刊）『梶山千鶴子　自解150句選』（2002年　北溟社刊）の両方に含まれており、梶山自身代表作の一つと考えているようである。それぞれの中で次のように彼女は述べる。

- 韓国板門店は一面の雪景色だった。ふいに舞い降りた一羽の鶴には国境はなかった。第一句集『國境』の題名となった句。（『自註現代俳句シリーズ七期7　梶山千鶴子集』5頁）
- 昭和41年1月、韓国に旅行した。十数名の殆どが男性ばかりの一行だった。当時の韓国は復興途上の有様だったが、初めての海外旅行ということもあってすべてに興味を持った。当時日本も韓国も必死のように感じた。水売りが桶をかついでいた。パゴダのあたりには人は屯してしていた。旅の一日、添乗員に無

理を言って板門店へ案内してもらった。円卓会議の椅子にも座った。「帰らざる木の橋」も見えた。途中の非武装地帯には人影はあまり見えず真っ白な雪がすべてを覆っていた。ふいに鵲が叫ぶように鳴いた。そして目前に音もなく一羽の鶴が現れたのだった。…後略…　（『梶山千鶴子　自解150句選』2頁）

二つの自註集の両方に採られている海外詠がもう一句ある。サイパン旅行の際に書かれた「片翼の翳りサイパン大西日」という句である。第2次世界大戦において激戦地となったサイパンでは、多くの日本人兵士たちが投降を拒み自ら命を絶った。その悲しい崖は、バンザイクリフやスーサイドクリフとして知られている。この句の中には、具体的な要素は持ち込まれていないが、「大西日」の「翳り」という一語が、歴史上の惨劇をたちどころに思い起こさせる。それはあたかも師・多田裕計が長崎への原爆投下の瞬間を捉えるのに「爆心の丘に蟬たぎるとき翳る」と「翳る」の一語で見事に射止めたことと符号している。以下に梶山自身の註を引く。

- グアム島からサイパン島へプロペラ機で飛んだ。戦のことを思い出して心が痛んだ。

（『自註現代俳句シリーズ七期7　梶山千鶴子集』14頁）

- 昭和43年1月。グアム、サイパンに旅行。当時のグアムにはホテルも少なく米軍の将校宿舎に泊まった。その宿舎のドアーを開くと海岸に続いていた。滞在中の一日、プロペラ機でサイパン島に渡った。島へは夕方、翼が翳りながら着陸。戦跡を訪ねるためだった。玉砕のこと等を思い、胸が張り裂けるようで足が竦んだ。…後略…　（『梶山千鶴子　自解150句選』8頁）

7) 『和漢三才圖會』（介貝類　四十七）に「一殼は舟のごとく、一殼は帆のごとくし、風に乗じて走る。故に帆立蛤と名づく。」という記述が見られる。

8) これは「声が先きに」の句が作品として劣ってるということではなく、むしろ筆者としては逆であると考える。このあたりが俳句、あるいは梶山にとっての大きな問題である。梶山はそれを無意識のうちに感じ取り、先回りしていうが、「社会性俳句」を脱却していったと考えることもできる。

9) 上野千鶴子　黄金郷

10) 第2句集多田裕計の「海外詠減少に関する感想」

11) 林博史「日本軍の命令・電報に見るマニラ戦」（「自然・人間・社会」関東学院大学経済学部教養学会第48号　2010.1　所収）

12) （1992年　俳人協会刊）

13) この句には以下のような自註がある。

現代俳句協会主催の中国旅行に参加した時、北京は四十度の暑さだった。そしてなんと中国は人口の多いところだろうと思った。天安門広場のところどころに歩哨が礼儀正しく立っている。その前を隠元豆をぶら下げた男や女が沢山あるいている。天秤棒に括りつけている人や手に抱えきれないほどの束を両手に持って、急ぐでもなく、ぶらりぶらりと歩いている。畑からの引き立てかもしれない。根にも葉にも土がついていて、ぽろぽろこぼれている。中国はどこを見てものどかであるが、太陽だけはギラギラと照りつけている。

（『梶山千鶴子　自解150句選』85頁）

14) 短詩型文学の宿命ともいえる「あらかじめ限定された情報の問題」によって、言語のもつ複層的な解釈可能性がより一層拡大される。それによって、「作者が必ずしも意図していない方向の解釈」のほうが面白いという皮肉な現象も多々起こり得る。これは一般的には魅力のひとつとも言い得るが、こと「社会性俳句」においては課題でもある。

Changes of the Topics of Haiku Written Abroad by Chizuko Kajiyama : Theory and Practice Art Sightseeing Study ⑧

HIRAI, Ken

Many haikus are included in “Kokkyou −the country boundary”, the first publication of Kajiyama Chizuko. Those works are classified in following three.

1 The works which were drawn with a bright color

2 The works which strongly include social messages

3 The works with a traditional atmosphere

Many works made abroad belong to the social message type (Type No 2). However as for many works made in Japan also include strong social messages. The reason why she included social messages in her Haikus is because Tada Yukei, the teacher of her Haiku did it in the same way before. But after the second collection of haiku, the element of the social messages fades in works made abroad. This tendency is similar about the work made in Japan. I analyze the characteristic of “the country boundary” in comparison with a haiku theory of Yukei Tada in this report. In addition I warite transformation of characteristics in works made abroad.